

五木寛之

流されゆく日々
(抄)

一九七五～一九八七年

講談社

五木寛之

流されゆく日々
(抄)

一九七五～一九八七年

講談社

なが
流されゆく日々（抄）
ひび
一九七五—一九八七年
一九九五年七月二日 第一刷発行

著 者 五木寛之
いつき ひろゆき

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二二—二一

郵便番号 一一二—〇一

電 話 編集部 〇三—五三九五—三五〇五

販売部 〇三—五三九五—三六二二

製作部 〇三—五三九五—三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

定価はカバーに表示してあります。



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送り
ください。送料小社負担にてお取り替えいたし
ます。なお、この本についてのお問い合わせ
は、文芸図書第二出版部あてにお願いいたしま
す。本書の無断複写（コピー）は著作権法上で
の例外を除き、禁じられています。

© Hiroyuki Iisaki 1995 Printed in Japan

流されゆく日々
(抄)

故・野間惟道氏に捧ぐ

まえがきにかえて

「記録」と「記憶」という対比にこだわって続けて十数年が過ぎた。「記録」はなにも語らない、というのが私の偏見である。死者一、という数字の背後にどれだけの物語が存在するかを、「記録」は決して伝えない。人間の物語は記憶によって支えられる。しかし「歴史」は「物語」を無視して平然と成立してしまう。そこで切り捨てられ消去されるものは、肉体をもった人間の「記憶」である。

「日刊ゲンダイ」という行儀の悪い夕刊誌に、行儀の悪いコラムを私が連載しはじめたのは、一九七五年十月、同誌が創刊された第一号からだ。当時、夕刊紙といわずに、あえて夕刊誌と称したところに私は注目した。「紙」と「誌」では、記憶と物語に対する姿勢が大きくちがう。そこにはニュースを創つていこうという不逞な在野ジャーナリズムの本能がおのずと感じられたのである。

創刊当時のクルマの両輪は、故・野間惟道氏と、川鍋孝文氏のお二人だった。両氏の熱心な（実際にはかなりやけくそな）推めで、私は自由気ままな雑文の連載をはじめることとなった。

「いつまでやるんですか」「つづけるまでやってください」「いつつづづれそうですかね」「そのうちつづづれるんじゃないですか」

といった、ちよつと聞くといい加減とも思われるような酔余の会話が現実となって、「流されゆく日々」がスタートしたのである。

同時に連載をはじめた松本清張氏も、柴田錬三郎氏も、いまは故人となつてしまわれたが、いつつぶれるかとトトカルチヨの対象にまでなつた夕刊誌のほうは、いまでは北海道から九州までの広い読者に支持される異色の新聞として成長している。

最初の数年はわざと談話体の文章を書いてみたりもした。さらに八〇年代のうちの数年間は、私がしゃべり、構成員がそれをまとめるという形式を試みた時期もあった。喫茶店で勝手な放談に花を咲かせ、正津勉、平栗貞夫（オキ・シロー）、山川健一、などの各氏にまとめをお願いしたことなども懐かしい思い出である。八〇年代の後半から現在までは、毎日一回分ずつ書いてきた。ほとんど一日のストックもなく、毎晩、翌日に発売される誌面のための原稿を国内はもとより世界各地からFAXで送りつづけてきたのだ。この、原稿のストックを要求しないというところに、「日刊ゲンダイ」のつよさと魅力があるように思う。とにかく未明までに原稿を入れさえすれば、その日の午後にはキオスクでその文章が売られているのだ。もちろん、そんなサーカスの綱渡りのようなきわどい仕事ができるまで続いたのは、創刊以来、じつに二十年にわたって担当してくれている愛場謙嗣氏や、編集スタッフの忍の一字あつてのことではあるが。

それにしても、この激動の二十年間を、とりあえず中途で放り出すことなく続けてくることができたことは、一種、奇蹟のような感じさえする。病気で倒れたり、交通事故にまき込まれたりしなかったことを、素直に感謝すべきだろう。この連載の中に登場する友人、知人たちの、なんと数多くが故人となつてしまったことか。

そして二十年間の連載回数も、ようやく五千回に近づこうとしている。「日刊ゲンダイ」が創刊二十周年を迎えるにあたり、一万数千枚の原稿のなかからその一部を選んで、『流されゆく日々（抄）』上下二巻にまとめることをすすめてくださった講談社出版部のご好意に感謝するとともに、A・Dの三村淳氏、写真家の石山貴美子

氏、編集担当の林雄造氏、市田厚志氏、そしてなによりも『日刊ゲンダイ』読者の皆さんに心からお礼を申し上げます。

『流されゆく日々』は、今後も続くのだろうか。そして時代の流れ行く先は？ その答は私にもわからない。列島で生起する日常の記憶を、ただ意味もなく日々、書き続けてゆくばかりだ。

一九九五年 横浜にて

五木寛之

装訂／三村
淳

●目次

まえがきにかえて 3

1975年(昭和50年)

「阿佐田哲也杯」が巷に続出すること 16

金沢芸者衆の言語感覚 17

腰巻文学賞というヘンな賞 20

長嶺ヤス子とガルシア・ロルカ 21

野坂昭如氏と「ベルサイユのばら」見物 23

吉行淳之介さんからのアドバイス 24

「夕刊フジ」の担当は美人ですぞ 26

「GORO」誌で名人戦に出場 27

雀聖阿佐田、ハグキグマ畑に敗る 29

深沢七郎さんはなぜイヌを飼わないか 30

頭痛がするときのブルース 32

色っぽい映画がみたいと思う 33

師走の街を横目で眺めながら 35

クレージーなり75年の年の暮 36

1976年(昭和51年)

物書きにとって今年はどんな年だろう 38

ちあきなおみと八代亜紀 39

藤圭子モデル説の間違いを訂正 41

マドリッドの二つの顔 42

名人福地泡介氏と卓を囲む 44

羽仁五郎さんとおかしな一夜 45

君、麻雀をするなかれ 47

伊坂芳太良さんのこと 48

日影丈吉氏のまゑがきは面白い 50

夜明けの高橋和巳が踊ったGOGO 51

証人として呼出されること 53

民事十七号法廷にて 54

ドクトルまんぼう先生は巨人ファンだ 56

原作者としてのロレンス・ダレル 57

ムハメッド・アリと喋った夜 59

雨の夜の土曜日は赤坂で 61

ソ連のマフィア小説の広告 62

社会主義国における冷房社会の悪夢 64

石井さんの画集 65

対談・対談・対談 67

師走の夜の編集会議 68

さらば一九七六年！ 70

1977年（昭和52年）

三十二年ぶりの剣道 72

新宿日活名画座の思い出 73

文学賞の選考の季節がきた 75

すべてこの世は気休めだ 76

喫茶店とぼくらの生活 78

北海道の旅から 81

唐十郎氏との対談のこと 82

ホテルにまつわる思い出 84

渋谷から新宿への一夜 85

クニニリングス論議 89

今年もまた流されて 91

1978年(昭和53年)

対談集を出そうかと迷う 93

ボブ・ディランとソ連歌謡界 96

「悪霊」と「豚魔」との落差に思う

99

小松砂丘と鴨居悠のこと 102

「準別王子の叛乱」を観て 104

一九七八年の暮に思うこと 107

1979年(昭和54年)

ジャンジャンで喋ります 109

岡本太郎さんとピカソ 110

表現行為と喋ること 113

カリフォルニア病牀八尺 115

さらば流れゆく七〇年代よ 120

1980年（昭和55年）

正月に読んだ三冊の本 122

「カイエ」とボルヘスとジャズのこと 126

バルカンの星の下に 130

お寺さんのエネルギー 132

深夜に中世の闇を思う 134

一九八〇年の暮に思うこと 138

1981年（昭和56年）

近ごろ面白い雑誌考 140

故・赤尾兜子さんのこと 145

『三教指帰』と密教の思想 146

組織者としての蓮如像 152

信仰と政治のはざまに 161

1982年（昭和57年）

ぼくの京都ぶらぶら日記
167

最近の雑誌を展望する
173

'82年の暮に思うこと
182

1983年（昭和58年）

幻の宗教都市を訪ねて
184

花と嵐の南紀を走るの記
189

記憶の中のカヤカベ教
194

1984年（昭和59年）

日本重層文化の可能性
200

柳田国男と南方熊楠
210

二上山から熊野への道
220

写真がなんだか面白い
226

鈴鹿サーキットの夏
232

1985年（昭和60年）

「風」はどこへ吹いているか 239

地球のリズムを呼吸する 250

白夜の幻想が色褪せるとき 253

たそがれのアウトバーン 258

「ヤヌスの首」と「鷲の頭」 272

ユキズリに雪吊りの街へ 277

川岸にきざまれた記憶 280

冬の帯広へのみじかい旅 283

筑豊さてみれば雪景色 290

薄明の85年が暮れてゆく 294

1986年（昭和61年）

ナグネの春のホギうた 299

冬の網走番外地 303

記憶はどこまで正確か 306

はじめての街を歩く 312

へなしくずしの死の終り 320

スコットランド一週間の旅 329

鈴鹿八時間耐久を見る 341

奇怪な男たちの世紀末 344

ソウルの巷に流れる歌 349

二上山への道を歩く 358

マカオ・グランプリ出場記 362

1987年(昭和62年)

出雲・隠岐冬景色紀行 367

アンカレッジの闇屋問答 380

ルネッサンスとジャパン 382

ドラマチック・スズカの夏 388

イスタンブール小景 391

蓮如をたずねての旅 403

全タイトルリスト 415
索引 444